
再び、その運命救います

御風達弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再び、その運命救います

【NZコード】

N1235F

【作者名】

御風達弥

【あらすじ】

世に世界は八百万。苦しみの運命を背負うものは数知れず。そんな人々の運命を救うべく、連休明けの一人が今日も行く。次の連休まで、しっかり仕事、やらせていただきます。

第一話「連休終わりました」（前書き）

作中に登場する固有名詞は、実在の物とは一切関係ありません。

第一話「連休終わりました」

朝の光が、カーテンの隙間から彼女の顔を優しく照らす。

鳥の囀りが、心地よいリズムとなつて朝の風景に花を添えている。
心地よい朝。

そ、前の連休明けも、こんな朝の風景から始まっていた。そして、目を覚まさない彼女へ、強烈に朝を告げる、

ベニンギー！

二二

強烈に朝を告げる金だらいか直撃した

「お前が何をやったか？」

：起きたわよ

お韓食食へて邊体にてかにれ
「之の前二一言切ニ尋ねニ」。

その前は一言物を尋ねたし

「スコットランド」

「金だらいです。」

「見ればわかるわよ。

「お聞かないでござい」

「ウラゲノミー」

「アーニャは？」

「なんですか？」

「私が聞きたいのは、何で私の顔の上に金だらけが落ちて来たのか、つてことよ。」

「セツトしたからですよ。」

「誰が？」

「私が。」

「なんで？」

「あなたが起きないからです。」

「他に方法は考えつかなかつたわけ？」

「はい。」

「嘘つけえええええつー！」

小鳥達は、一斉に飛び立つてしまつた。

「仮にも女の子を起こすのに金だらいでビーウーこと…あんたも男性の端くれなら、もつと紳士的な起こし方つてものがあるでしょーがつ！」

「紳士的な？」

「そうよつ！」「

「例えば？」

「た、例えばつ！？」

「はい。」「

「た、例えば…。ほ、ほら、なんか貴族のお嬢様を起こす風とか！焼きたてのクロワッサンと煎れたてのカフェオレの香りなんか漂わせちゃつたりなんかして、ドアの外から軽くノックを二、三回。お嬢様、朝でございます。みたいな。」

「それあなたが起きるとは思えないのですが。」

「ど、どーゆー意味よ。」

「ドアの外から声をかけて起きるくらいの相手なら、わざわざ金だ

らーをセントするような手間は最初から要らない、ってことですよ。

「失礼な！ 私だつてその気になれば……」

111

「…は…はら…早く支度しないと遅刻しちゃ…あり…ない…こと…朝ごはんにするわよっ！」

「……」まかせたつもりなんでしょうかね？あれで……。

…まあ、そんなこんなで朝食が終わり、朝の支度も一通り完了。

「うん、今日も決まつてるわー私つてば

「いいやむ縛ねばならぬと愚るお主は止と……？」

「ああ、おめでとう。」

「…相変わらず、そこはつづこんでこないのね。」

たにて、いゝも綺麗は決まっているのは本日の事ですから、

「はい。」

黒のカツターシャツに黒のスラックス姿の二人。これから仕事へと

五五
一〇一

二二二

リビングのカーペットをめくら上げると、そこに現れたのは魔法陣。その魔法陣に向かって、

「ゲート。」

力ある言葉を投げ掛ける。すると、静かな鼓動と共に魔法陣から門が出現し、その扉を開けた。

「それでは、今週も仕事を頑張りましょ。」
「はいはーい。」

世に世界は八百万。

一つの世界に暮らすものは他の世界の存在を知らないが、世界は確実に、驚くほど数多存在している。

そしてそれらの世界には、

必ずといっていいほど、苦しみや哀しみの運命を背負わされている者が存在する。

自らの力だけではどうすることも出来ないよつた、運命の枷をはめられた者達。

そんな者達の運命を救う仕事。

救済士。

運命の女神の導きに従い、どんな世界にも降り立つて、相手を苦しみの運命から解き放つ。

それが、救済士の仕事。

フィーラとウイング。それが、世でただ一人の、救済士の名前。

「…。」

部屋の中央に、女性らしき人影が佇んでいる。

純白のローブとフードをその身に纏い、フードの隙間から、微かに

□元だけが覗いている。

静寂が支配する部屋の中、不意に女性が振り返った。

「来ましたね、フィーア、ウイング。」

女性が振り返った視線の先。そこに、先ほどの二人が立っていた。

「ただ今戻りました、ディステイーナ様。」

「二人とも、連休はいかがでしたか？」

「そりやもう、満喫させていただきましたですよ。もう少し休みが続いてもいいくらいいや、むしろ続いてほしいくらい。」

「残念ながら、それは出来ません。週一休みですら取れない会社がある昨今、定期的に連休がとれることを逆に感謝なさい。」

「はい。」

「世に世界は八百万。救つても救つても、苦しみの淵でもがく命は数知れず。そんな命達の運命を救えるのは、あなたがた一人だけ。大変でしょうが、よろしくお願ひします。」

「はい。」

「では早速、今日の仕事です。」

そう言って、静かに手をかざすディステイーナ。その手の下に、巨大な水晶球が出現した。

無色透明な水晶球の中に、何かの姿が映し出された。

「…これは？」

「…一人？」

水晶球に映し出されたのは、二人の人物。筋骨隆々の男性と、痩せ気味な体型の女性。

「今日は、同じ世界ではありますが、別々の場所へ向かってもらいます。」

「え！」

「休み明け最初の仕事から単独任務ですか？」

「はい。」

フードの下からわずかに覗く□元に笑みを湛え、ディステイーナは

言葉を続けた。

「まず、フィーラに向かっていただくのはほこからりの男性の方。リン
グネームはファイヤーストーム燃鬼。^{もえぎ}」

「り、りんぐねーむ？」

「格闘家の方ですか？」

「プロレスラーです。」

「ああ～…なるほど。」

「で、その燃鬼さんがどんな苦難の運命を？」

「彼の苦しみの運命、それは、彼が強すぎる」とです。」

「あ～、つまりあれですね？ まともに戦える相手がないから、フル
ストレーシヨン溜まっちゃつてるつてわけだ。」

「まあ、有りがちなパターンですね。」

「確かに有りがちです。が、それだけではありません。」

「へ？」

「彼には、強すぎる以外にも重大な悩みがあるのです。それは…」

「…？」

「本名が萌黄萌春もえぎもえはるだということです！…」

「…なんですか？ 本名が？」

「萌黄萌春？」

「ああ…何と辛い宿命。」

「知るかあんなもんつ…！ そんな悩みは親に言え親につ…！ 第一、あ
たしにそんな悩みぶつけられても、どうしようもないでしょが！」

「どうにかして彼を改名してください。」

「どうせいつちゅーんですかあつ…？」

「次にウイニングですが、」

「流すなあつ…！」

「ウイングには、いかの女性のところに行つてもらこます。リンクネームは……」

ケネームは...」

「またリングネーム！？」

「初日はプロレスラー特集ですか?」

「つていうかこの人選つて、ディスティーナ様の趣味なんじやないの？」

「最近プロレス観戦がお好きなんですね、ディステイーナ様。」

「戦争に巻き込まれたとか、異星人に拉致されたとか、もっと救いが必要な人つて沢山いると思うんだけどなあ。」

「世に世界は八百万。その中からあえてプロレタリアを」

するあたり、公私

「わー? わわわわわわわっ! す、すいません! みんなさい申し訳ござりませんつ! 」

「わかればよろしく！」

卷之三

「つべこべ言わずに、あなた方は仕事をこなしなさい。」

「はい。それで、この人は？」

「彼女の『シケネーム』はアテナ
『シケネーム』は勝利の女神」

「その結果ですね」

「ある意味そのままです。が、決していい意味ではありません。」

?

「彼女の、勝利の女神、というニックネームは、対戦相手にとつての、なのです。」

「…つまり？」

「めちゃくちゃ弱いんです、彼女。デビュー以来、勝つたことがありません。」

「なるほど。で、仕事内容は、彼女を試合で勝たせる」と、で、よろしいですか？」

「さすが。飲み込みが早いですね。」

「…いや、普通にわかるでしょ、そこまで来たら。」

「というわけで、行つてらっしゃい。」

「めっちゃ淡泊な見送り方ですねえ…。」

「今に始まつたことではないんですけどね。」

休み明け一発目から、主の趣味全開の仕事内容。

今週の二人の仕事は、こんな感じで幕を開けたのだった。

第一話「連休終わりました」（後書き）

やつと書けました…。超スローペースですが、温かい田で読んでいただけると嬉しいです。

第一話「レスラーの運命救ひます（一）」（前書き）

作中に登場する固有名詞は、実在のものとは一切関係ありません。

第一話「レスラーの運命救います（1）」

「というわけでやつてきたわけだけど……」
とある世界、とある街の公園に降り立つた二人。が、二人の表情は最初から曇っていた。

「聞きそびれたことがありますよね。」「そーなのよねえ……。」「聞きそびれたことがありますよね。」「うへん……？」

「私達つて、どういう立場なんでしょうね？今回。」「うへん……？」

立場。八百万の世界を巡る彼らにとつて、これは重要なポイントである。

「ファンタジックな世界とかなら、旅人とかでなんとでもできるんだけど……。」「ここはどう見ても違いますからね。」「しかも今回は個別でしょ？女が男性レスラーのことに尋ねていく理由つて何？ファン？」

「私の方も状況は同じですよね。しかも、ファンつていうだけだと

門前払いになりかねませんし……。」「性別が違うから、入団希望者、ってわけにもいかないわよねえ……。」「んへへへ……。」「すっかり悩んでしまった二人。と、

……案ずる」とはおりません。

「あ、ディスティーナ様。」

天からの声が、二人の元に届いた。

……あなたがたの立場はちゃんと考えてあります。今日、あなたが

たが向かう団体には、新任のメンタルトレーナーがやつてくね」になつてゐるのです。

「めんたるとれーなー？」

「精神的な面でのトレーナー、ですか？」

「なるほど。それなら自然とターゲットと接する」ことが出来ます

ね

「あの、ディステイーナ様。少し疑問があるのですが、よろしいでしょうか？」

……どうぞ。

「なんで、ファイアが男性のとこで、私が女性のとこなんですか？ 同性の方が仕事しやすいと思つのですが……」

……確かにその通りです。ですが、男女を入れ替えたこと。これには、深い意味があるので。

「おおつー？ なんなんですか？ 意味つて。」

……それは。

「それは？」

……男女入れ替えた方が、私が見ていて面白そうだからです！

「…………。」

と、いうわけで。あとまよひじへ。

.....。

「…………まあ、なんていうか…」

「割と予想通りな感じの返答だつたわね。」

「（ため息…）…仕方ない。行きますか。いつまでもじつしてゐわけにもいきませんし。」

「まあ～。仕事だから仕方ないわ。」

「ところでフイーア。あなたの救う相手の名前、ちゃんと覚えてますか？」

「なつ～馬鹿にしないでよねつ～これでも救済士の端くれなんだからねつ～」

「じゃあ、答えてください。」

「え～？ なんですよ～。」

「忘れてる気がするからです。覚えているなら答えてください。」

「…こ、いいわよ…。だから、せら、あれよ。改名するのが必要な名前よ。」

「そうです。」

「その～、だから…。」

「…。」

「…。」

「…。」

「鼻詰まり微熱太郎！」

「…萌黄萌春です。」

「…………そ、そつそつ～。つづかり改名後の名前言ひちやつたわ。」

「悪化させでビリあるんですか…。」

若干?の不安を感じながらも、それぞれの仕事先へと向かった二人。

果たしてこの単独任務、無事に成功するのかどうか。

「はい、本契約も済んだことだし、早速仕事に入つてもらいたいんだけど、いいかな？」

「勿論です！仕事のために来てるんですから。」

「お～、やる気あるねえ。いいことだ。しかし、君も珍しいよねえ。こんな厳つい男だけの職場にトレーナーとしてやって来るなんて。

「私、筋肉フェチですから！」

「はは、あまり変なことはしないでくれよ？」

初っ端から勢い全開のフィーア。やる気になつてているのか自棄なのかは微妙なところ。

彼女がやつて来たのは、この世界では老舗のプロレス団体「爆炎プロレスリング」。名前からして熱血全開である。

ここはそういう方針なのか、社長自らによる事務所での契約を済ませ、フィーアが次に連れて来られたのは併設されている道場。どうやらここは、事務所と道場と宿舎が同じ敷地内にあるらしい。

（鼻詰まり…じゃなくて、萌黄は…）

社長がフィーアのことを紹介している間、彼女は今回の救済相手を探して視線を走らせていた。が、水晶玉で一見しただけの相手を十数人の中から見つけ出すのは面倒になつたらしく、

（ま、どうせ向こうからやつてくるでしょ。）

恐ろしく気楽な思考と共に探すのをやめた。

一方、

「……」

「どうだつたかしら、トレーナーさん。」

「全体的に、組むときに一瞬視線が下がつてますね。自信が足りないのか、癖なのか。どちらにせよ、直した方がいいですよ。」

何故か普通にコーチをしてしまつていてるワイング。

彼がやつてきたのは発足してまだ数年という新興団体、「プロレスリングEF」。EFはヨーロッパファンタジーの略らしく、六人の所属選手のうち四人のリングネームに、北欧神話の神の名前がつけられている。

人数が少なければ、その分トレーナーとして、一人に接する時間は多くなる。ワイングにとつては好都合…だったのだが、

（…メンタルじゃなくてテクニックの領域ですよね、これ。）

何故だかメンタル以外の部分も任されてしまつていたのだった。それに関して説明を求めるど、

「戴いた資料には、メンタル以外の技術的な指導も出来ます、つて書いてあるけど。」

とのこと。

（ディステイーナ様…絶対わざとですね。）

心で深いため息をつくワイングだった。

第一話「レスラーの運命救います（一）」（後書き）

最近めつきりスローペースな執筆となってしまっておりますが、
りづに読んでいただけると嬉しいです。o(^ - ^)o
 憲

第三話「レスラーの運命救ひます（2）」（前書き）

作中に登場する固有名詞は、実在のものとは一切関係ありません。

第三話「レスラーの運命救います（2）」

「セレーナ」

場所は変わつてとある室内。ジムに併設されたカウンセリング室の
ような部屋の中、フィーアは腕組みをして仁王立ちしていた。どう
やら、ここがフィーアに与えられた仕事場らしい。

「するに、悩みのある人達が勝手にやさしてくるからその悩みを聞いてやつてくれ、ってことね。…メンタルトレーナーっていうよりカウンセラーね。何かが間違ってるわ、この団体。」

「よつしゃ、燃鬼！来るなら来いつ！！」

• • • • •

ウイングがいてくれればツツコミの一つでも入っていたところだが、生憎と今日はツツコミ役が不在である。さすがのフィーラも調子が狂つらしき。

「 どんな些細なホケも ッシカアツでヒモ生れのよなー 」
「 そう考へると、今日は紛れも無くハンデ戦だわ。 」

一体何と戦っているのかは本人にしかわからない。気持ちを盛り上げるかのようにパンパンッと頬を叩くと、フィーアは再びファイテ

「来るな！」——「……」

Γ
Γ
○
○

「…えーと。」

「…まあ、座つてみたりしけやつ?」

何ともドドドーな空気が室内に流れた。お約束といつものせやはっぱりあるものである。

狙つたかのようなタイミングで入つて来た若手レスラーを椅子に座らせると、フイーアも椅子に腰を下ろした。

「んで、なにかなあ。ちやつちやと話してちょーだいな。」

「は、はあ…」

「おいおい、ビーしたビーしたあ? レスラーがそんな覇気のないこ

とでヒーする?」

「そ、そなんんですけど…。…その事でこ相談が…」

「ほおほお? メンタルトレーナーたるこの私に相談とな?…いいでしょ?」聞きました?」

「……。」

ホントに大丈夫なんだろうか? 若手レスラーの顔に、明らかに不安の色が浮かんだ。それを黙つて見逃すフイーアではない。

「…むう~。」

「…?」

「疑つたわね?」

「は、はい?」

「今、私の事を疑つたわね?」

「え、…ええ?」

「こいつホントに大丈夫なのか? ちゃんとしたトレーナーなのか? そもそも筋肉が好きでここに来たような奴にまともに仕事が出来る

のか? だいたい何でそんなに美しいのに裏方なんてやつてるんだ? モデルか女優の方が圧倒的に向いているのに、敢えて裏方の仕事をするなんて嫌味な奴め。…とか考えたでしょ?」

「……、いえ！そ、そんなこと考へていません」
「じゃあ考へなさいよ。」

「は、はあ？」

「私がモデルや女優になつたところを考えなさいよ。」

「……？」

「全てはそこから始まるのよ！万物の始まりは考へることから始まるの！」

「……？」

理解不能
意味不明
困惑の極み

若手レスラーの脳裏に、様々なものが入り乱れ、最終的に、

（何で俺、ここに来ちゃつたんだろう）

という、後悔の念だけが残つた。

もつともフイーアには、真剣に悩み相談に乗ろうとしていた気持ちは更々無い。

自分の仕事は燃鬼の悩みを解決することであつて、それ以外の相手の悩みなど管轄外。テキトーにわけわからぬ事言つて遊んでやれ。そんな風に考へていた。

こんな調子だと燃鬼が悩み相談に来る来ない以前に解雇処分をくらう。いそゞだが、そんな都合の悪い事実はどこ吹く風のフイーアである。「と、いうわけで。」

「へ？」

「ジムに行くわよ。」

「……は、はい？」

「悩むよつもまづ行動！つじうじと悩んでる暇があるなら、その時間トレーニングに充てるべし！それが、自分を成長させる糧となるつー！」

「は、はあ……でもさつき、万物の始まりは考へることから……って言つて……」

「過去は振り返るなつー！若人が過去を振り返るなんぞ、百四十五年と少し早いわよつー！」

「は、はあ？」

「若者よ大志を抱けーーーほーぶるーくつー！」

「え、えええつー？」

そう言つて男の腕を掴んだフイーラは、問答無用でジムへと駆け出していく。

：一方、

「右一本、そこから左。」

「はいっー！」

バシッ！バシッ！ズバーンッ！

「右の戻しが遅いです。左を決めるために右を打つなら、右はもっと早く。」

「はいっー！」

ミットなど構えて、完全に打撃指導など始めてしまつてゐるウイングがいた。

さらには、指導の順番待ちなどしている選手もいるこの状況。（早いとこ仕事に取り掛かりたいんですけどねえ……。）

こちらもひぢらで困惑な状況のウイングであった。

第二話「レスラーの運命救こます（2）」（後書き）

一話あげるのにかなり時間がかかっております（^_^;）。ぼちぼちと書き進めてまいりますので、気長に読んでいただけすると嬉しいです。今回も読んでいただき、ありがとうございました。

第四話「レスラーの運命救ひます（3）」（前書き）

作中に登場する固有名詞は、実在のものとは一切関係ありません。

第四話「レスラーの運命救います（3）」

「……ふう。」

夕刻。やれやれ、といった感じで溜息をつくウイング。

メンタルトレーナーとして来たはずが、何故か技術指導まで行い、さらには練習スケジュールの作成までお願いされてしまったこの男。（完全にティスティーナ様の悪ふざけですよね…）

こういふ上司を持つと苦労します、と、ウイングはもう一つ溜息をついた。

今日の練習は終わり、選手達は皆帰路についていた。

「…結局、今日は話すら出来ませんでしたね。」

彼の本来の仕事は、所属選手の一人、アテナを試合で勝たせること。そのためには、まず彼女がどんな人物なのかを知りたいところだったが、今日はいろいろと忙殺されて仕事にならなかつた。

（明日に期待しましょうか。）

気持ちを切り替えると、ウイングはジム内の見回りを始めた。本来、コーチとして来た人間がする仕事ではないのだが、何故かこんな仕事を組み込まれていた。

（なんだか便利屋扱いですよね…つていうか、今日来たばかりの人間にやらせていい仕事なんでしょうか？）

心に大きな疑問を抱きつつ、ウイングは見回りを続ける。人気が無くなりしんとしたジム内。練習中の熱気が嘘のようだ。

（まあ、人は残つていませんから、見回るとしたら忘れ物とか電気の消し忘れとか…）

等と考えながら見回つていたウイングの足が、ぴたと止まつた。

（…………？）

ジム内のトイレに、まだ明かりがついていた。しかも中からは、ブラシで何かを擦るような音。

(誰かが掃除してるのでしょうか?)

だが、掃除の業者が出入りしている、ところ話は聞いていない。

(選手は皆帰ったはずですし…代表自ら掃除してゐる、とか?)
が、自ら掃除をするような代表なら、見回りを「一チにさせぬよつ
なことはしないだろ。」

(ふむ…)

コン、コン、

「あ、はあ～い。どうやら様ですか？」

ワイングがトイレのドアをノックすると、なんとものんびりした声
が返ってきた。

「そろそろ締まりをしようと思つてゐるのですが…掃除中ですか
?」

「あ、すこませ～ん。もつすぐ終わりますので～。」

「……。」

待つこと5分程。水が流れる音がして、みづやへ

「お待たせしました。」

ドアが開き、のんびりした声の主が姿を現した。

「え……。」

小さく驚くワイング。ぱちくつと一瞬きをして、改めて相手に問
い掛けた。

「…アテナさん?」

「はい～。そのような名前で呼ばれております～。」

のんびりした笑顔を見せて、アテナはワイングに答えた。

「え～と…」

「何でしょ～？」「

「何故トイレ掃除を？」「

「トイレは綺麗な方がいいからです～。」

「いや、そういう意味ではなくて…ああ、当番か何かですか？」

「いいえ～？私がここに来てからは、ずっと私がやつてますよ～？」

「はあ…。まあ、若手が掃除をするつていうのは、継社会において

は普通のことかもしだせませんが、ずっとお一人で？」

「はい～。このトイレ掃除と、道場内の掃除と、シャワールームの

掃除と、寮の掃除と…」

「ちょっとすいません。」「

「はい？」

「今言つたこと、全部お一人で？」

「はい～。」「

「…何でそんなことになつてているんですか？」

「何で、つて…？」

「明らかに一人でやる量じゃないと思つのですが…」

「あはは、そんなことないですよ～。一人で十分出来ますよ～。それにも～、嬉しいんですよ。」

「？」

「ひつやつて綺麗にすると、みんな喜んでくれるんですよ。綺麗になつてないと、みんな不機嫌です。それはいけないこと。みんながいい気分でいてくれるのが、私の幸せなんです。」

「…だから、全部一人で？」

「はい～。」「

「誰かに手伝つてもらつたりとかは？」

「そんなの、申し訳ないじやないですか～。私がここに来たばかりの時、みんなめんどくさそうに、いやいや掃除してたんですよ。そんなの駄目なんです。不機嫌はいけません。」

「

「…だから？」

「だから、全部私がやることにしたんです。そうしたら、みんないつも二コ二コしてくれて、私も嬉しくなるんです。」

「…まさか、とは思いますが。」

「はい？」

「試合は全力で戦つてますよね？」

「それが、全力を出したら私が勝ちそうになっちゃいまして…。相手の方が負けて傷つくのは私堪えられません。だから、全力は出せないんです。」

「で、一度も勝ったことがない、と。」

「はい。よくご存知ですね。」

（…どうしたものか…。）

話を聞きながら、ウイングは頭を抱えてしまった。彼女が大変に慈悲深い性格なのであらうことはわかった。だが、勝負事において、それは大部分でマイナスに作用する。というか、そもそも彼女は何故プロレスをやっているのだろうか。そこにウイングは引っ掛けっていた。

「あの、」

「なんでしょう？」

「何でプロレスラーになつたんですか？」

「何で、と申しますと、きっかけですか？」

「はい。」

「それは、辛い思いをする人を減らすためです。」

「…は？」

話がさつぱり見えないウイングに、彼女はさらに言葉を続けた。

「勝負事には、必ず勝者と敗者が生まれます。それは、世の理。仕方のないことです。そしてそれは、私一人の小さな力ではどうにもならないこと。」

「はい。」

「でも、そんな私にも出来ることがあるって気が付いたんです。それは、私が自ら敗者になること。やうすれば、私と勝負した相手は必ず勝者となります。」

「…………ええ。」

「勝利の喜びは心を豊かに満たしてくれる。やうやく笑顔になってくれる人がいてくれることが、私を満たしてくれる。敗者として生きることが、私の喜びなんです。だから」

「一言よろしいでしょうか…」

「はい?」

「格闘技をなめないでいただきたいつつ…」

滅多に聞くことの出来ないウイングの怒号が、静まり返ったジムの中に響き渡った。

：一方、ファイアの方はと黙つと、

「おーおー、ビーしただーしたあー！もーいつちよ立つてこんかーいー！」

「…………ひう、ひうう…」

「ひよこみみたいな声で息してる暇なんてないんじゃーー！」

リング上では、完全に若手いじめと化しているファイアの猛特訓が行われていた。他の選手達も帰るのを忘れてその光景を唖然と見つめている。

無理もない。メンタルトレーナーとしてやって来ているはずの女性

が、いきなりトレーニングに乱入し、しかも無茶苦茶高い身体能力を發揮して壮絶な指導を行いだしたのだから。

「強靭な精神は強靭な肉体に宿るつ！悩みがある奴はとにかくまで鍛えまくつてやるわッ！！」

はた迷惑なフイーアの悪ノリであつた。

「…その辺にしてやつてくれねえか。」

「んあつ！？」

「鍛えるのは結構だが、ものには限度つてもんがあるからな。」

「ほほお…？」

さすがにやり過ぎと見たのだろう。レスラー達の中でも、一際体格のよい男が一人の間に割つて入つた。

「いい度胸してるわねえ…」

「度胸がなきや、レスラーは務まらんのでな。」

第四話「レスラーの運命救ひます（3）」（後書き）

時間がかかりましたが、なんとか形に出来ました（・・・・・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235f/>

再び、その運命救います

2010年11月23日17時47分発行